

唐以前の詩における鳥の声を「き（聴・聞）」くことについて — 漢から南齊まで —

阿部正和

はじめに

稿者はこれまで西晋を中心とした詩、『詩経』、『楚辞』における自然の音に対する考察を行ってきた。これらは、それぞれのテキストが、自然の音をどのように「き（聴・聞）」こうとしているのか、また音を通して世界をどのように把握しているのか、ということ明らかにしようとする試みであつた。そして現在はその研究の一環として、唐以前の詩において、自然の音を「き（聴・聞）」くという表現のある詩の考察を行っている。

自然の音を「き（聴・聞）」くという表現のある詩は、漢から見られるが、西晋より増え始め、劉宋の謝靈運、鮑照にはそれぞれ用例が多く、南齊の謝朓を経て、梁に到ると「聴○○詩」などと、詩題とされるようになる。

次にどのような対象を「き（聴・聞）」いているのかというと、鳥の鳴き声、風の音、川や波といった水の音、秋の虫の鳴き声、蟬の鳴き声、猿の鳴き声、雷の音、雨

の音である。そしてそれぞれの対象の音については、水の音は漢に「聞」く一例があるもののしばらく見られず、劉宋以降に「聴」く例が多く見られるようになる、猿の鳴き声を「き（聴・聞）」く詩が見られるようになるのは、劉宋以後である、などと対象によつて時代的な変遷がある。

したがって今後はそれぞれの対象について、見ていかなければならないが、本稿では最も用例が多い鳥の声を「き（聴・聞）」くことについて、整理し、その考察の一端を述べたい。

一 漢から南齊の鳥の声を「き（聴・聞）」く

鳥の声を「き（聴・聞）」くものは、漢に「聴」一例、「聞」一例、魏に「聴」一例・「聞」一例、西晋に「聴」二例・「聞」三例、東晋に「聞」一例、劉宋に「聞」四例、南齊に「聴」三例・「聞」一例がある。以下で各時代の例を見ていくこととする。

(一) 漢

「鷄鳴」〔樂府詩集〕卷二八

：

舍後有方池 舍後には方池有り

池中双鴛鴦 池中には双鴛鴦

鴛鴦七十二 鴛鴦は七十二

羅列自成行 羅列して自ら行を成す

鳴声何啾啾 鳴声 何ぞ啾啾たる

聞我殿東廂 我が殿の東廂に聞こゆ

：

「鷄鳴」は、歌辞が首尾一貫せず、完全な詩ではないと考えられてきたが、小尾郊一氏は、「天下太平の治まれる世に住みながら、蕩子よ、どこへ行くのか」という前半の呼びかけに対し、「桃李の異種の木ですら身代わりを惜しまぬに、私は実の兄弟からすてられた、それで私はよそへ行く」と、すねて答える後半との間に、「相逢行」古辞をもじって歌い込んだあそびの部分が入っていると解釈する。そこで「相逢行」を見ると、

「相逢行」〔樂府詩集〕卷三四

：

入門時左顧 門に入りて時に左顧すれば

但見双鴛鴦 但だ双鴛鴦を見るのみ

鴛鴦七十二 鴛鴦は七十二

羅列自成行 羅列して自ら行を成す

音声何啾啾 音声 何ぞ啾啾たる

鶴鳴東西廂 鶴は東西の廂に鳴く

：

とある。「鷄鳴」では「鴛鴦」のにぎやかな声が聞こえてくる、とあり、「相逢行」ではその姿を見ると、にぎやかに鳴いている、とあって、違いはあるものの、ともに太平の世に榮えている家の庭の様子を描写した場面で、「鴛鴦」が鳴いていることがわかる。

「鴛鴦」は、『毛詩』小雅・鴛鴦に「鴛鴦于飛、畢之羅之。君子万年、福祿宜之。」（鴛鴦 于に飛び、之を畢し之を羅す。君子 万年、福祿 之を宜しくす。）とあり、その毛伝に「鴛鴦匹鳥。」（鴛鴦は匹鳥なり。）、鄭箋に「匹鳥言其止則相耦、飛則為双。性馴耦也。」（匹鳥とは其の止まれば則ち相耦し、飛べば則ち双と為るを言ふ。性は馴耦なり。）とあるように、君子の太平の世を言祝ぐ詩に詠まれる雌雄むつまじい鳥である。

『毛詩』小雅・鴛鴦自体には、「鴛鴦」の鳴き声は描写されていないが、『毛詩』周南・関雎や周南・葛覃では、「雎鳩」や「黄鳥」が和して鳴くことが、雌雄のむつまじさや太平といった幸福の象徴とされており、それらと同じように考えられていたのであろう。

次の「古詩為焦仲卿妻作」では、その仲むつまじい声

に耳が傾けられる。

「古詩為焦仲卿妻作」(『玉台新詠』卷一)

：

両家求合葬 両家 合葬を求め
合葬華山傍 華山の傍らに合葬す
東西植松柏 東西に松柏を植ふ
左右種梧桐 左右に梧桐を種う
枝枝相覆蓋 枝枝 相覆蓋し
葉葉相交通 葉葉 相交通す
中有双飛鳥 中に双飛鳥有り
自名為鴛鴦 自ら名づけて鴛鴦と為す
仰頭相向鳴 頭を仰ぎて相向かひて鳴き
夜夜達五更 夜夜 五更に達す
行人駐足聽 行人 足を駐めて聴き
寡婦起彷徨 寡婦 起ちて彷徨す
多謝後世人 多謝す 後世の人
戒之慎勿忘 之を戒めて慎みて忘るること勿れ

引用したのは、「古詩為焦仲卿妻作」の最後のところで、亡くなった二人を合葬した墓の様子を描写した場面である。そこには松柏や梧桐が植えられているが、その中に「鴛鴦」がいて、毎晩明け方まで鳴き続ける。そして道行く人は足を止めてその声に耳を傾け、寡婦は起き上がってさまよう、とする。

つまり「古詩為焦仲卿妻作」において、「鴛鴦」は死後結ばれた焦仲卿と劉蘭之の化身であり、仲むつまじい幸福の鳥だからこそ、道行く人はその声に耳を傾けるのである。

以上のように漢の詩では、「き(聴・聞)」く対象は共に「鴛鴦」であつたが、その声を幸福を象徴する声として「き(聴・聞)」している、と言うことができる。

(二) 魏

徐幹「情詩」(『玉台新詠』卷一)

高殿鬱崇崇	高殿 鬱として崇崇
広厦凄泠泠	広厦 凄として泠泠
微風起闌闌	微風 闌闌に起こり
落日照階庭	落日 階庭を照らす
踟躕雲屋下	踟躕す 雲屋の下
嘯歌倚華楹	嘯歌して華楹に倚る
君行殊不返	君 行きて殊に返らず
我飾為誰榮	我が飾 誰が為にか榮えん
鑪薰闌不用	鑪 <small>ろく</small> 薰 <small>くん</small> 闌 <small>と</small> ちて用ゐず
鏡匣上塵生	鏡匣 <small>きやうげふ</small> 上塵 生ず
綺羅失常色	綺羅 常色を失ひ
金翠暗無精	金翠 暗くして精無し
嘉肴既忘御	嘉肴の既に御するを忘れ
旨酒亦常停	旨酒も亦常に停む
顧瞻空寂寂	顧瞻すれば空しく寂寂として

唯聞燕雀声 唯だ燕雀の声を聞くのみ
憂思連相属 憂思 連りに相属し
中心如宿醒 中心 宿醒のごとし

徐幹「情詩」は閨怨詩であり、女性が君が帰らないの
で着飾ることがなくなり、食事も進まないと恨みを述べ
た後に、ふと振り返つてもひっそりとして寂しく、「燕雀」
の声が聞こえてくるだけで、心の中は二日酔いのように
辛い、とする。

「燕雀」は『史記』陳涉世家の「燕雀安知鴻鵠之志哉。」
（燕雀 安んぞ鴻鵠の志を知らんや。）や、『楚辞』九章・
涉江に「燕雀烏鵲、巢堂壇兮。」（燕雀烏鵲、堂壇に巢く
ふ。）とあり、その王逸注に「燕雀烏鵲、多口妄鳴、以喻
讒佞。」（燕雀烏鵲は、多口妄鳴にして、以て讒佞に喩ふ。）
とあるように、小人や佞臣のイメージを持つ語である。
しかしこの詩においては、そのような暗喩は読み取り難
いと思われる。

明帝曹叡「長歌行」(『樂府詩集』卷三〇)

静夜不能寐 静夜 寐ぬる能はず
耳聴衆禽鳴 耳に衆禽の鳴くを聴く
大城育狐兔 大城は狐兔を育み
高墉多鳥声 高墉は鳥声多し
壞宇何寥廓 壞宇 何ぞ寥廓たる
宿屋邪草生 宿屋 邪草生ず

中心感時物 中心 時物に感じて
撫劍下前庭 劍を撫して前庭に下る
翔伴於階際 階際に翔伴すれば
景星一何明 景星 一に何ぞ明らかなる
仰首觀靈宿 仰首して靈宿を觀れば
北辰奮休榮 北辰 休榮を奮ふ
哀彼失群燕 彼の失群の燕の
喪偶独煢煢 偶を喪ひ独り煢煢たるを哀しむ
单心誰与侶 单心 誰をか与に侶たらん
造房孰与成 房を造ること孰をか与に成さん
徒然喟有和 徒然として和有らんことを喟すれば
悲慘傷人情 悲慘として人の情を傷ましむ
余情偏易感 余が情 偏へに感じ易く
懷往增憤盈 往を懷ひて憤盈を増す
吐吟音不徹 吐吟するも音は徹らず
泣涕沾羅纓 泣涕 羅纓を沾す

明帝曹叡「長歌行」は、廢墟と化した城に立つ詠歌主
体が、夜空の星を眺めながら、群を失った燕と自己を重ね
てその孤独を嘆くもので、その冒頭に、眠ることがで
きない静かな夜に、「衆禽」の声に耳を傾ける、とある。
「衆禽」の用例は、禰衡「鸚鵡賦」(『文選』卷一三)
に、「配鸞皇而等美、焉比德於衆禽。」(鸞皇に配して美
を等しくし、焉んぞ徳を衆禽に比べん。)と、鳳凰・鸞鳥
とその美を等しくする鸚鵡の徳は「衆禽」と比べものに

ならない、とあるが、唐以前の詩において「衆禽」という語を用いているのは、明帝「長歌行」のみである。

そこで「衆禽」と同じ意味と考えられる「衆鳥」の用例を見ると、『楚辞』九弁では、「衆鳥皆有所登棲兮，鳳独遑遑而无所集。」（衆鳥は皆 登棲する所有るも、鳳独り遑遑として集る所無し。）とあり、その王逸注に「群俊並進、処官爵也。」（群俊並進し、官爵に処るなり。）とあるように、俊臣をイメージさせる。しかし張衡「西京賦」〔『文選』卷二〕では、上林苑の様子を描写する場面面で「植物斯生、動物斯止。衆鳥翩翩、群獸駉駉。」（植物^ス斯に生じ、動物^スに止る。衆鳥 翩翩たり、群獸駉駉たり。）と、ただ単に多くの鳥とする場合もある。

この「衆禽」について、岡村貞雄氏は、明帝「長歌行」と「傷歌行」古辞が酷似していることを指摘し、明帝「長歌行」の冒頭を「静かな夜を、独りで眠ることができない。やるかたなく庭の中に出てみた。方々で夜禽が鳴く。その声は伴侶を失って鳴く、悲しい叫び声である。…」と要約している。

氏が「衆禽鳴」を「伴侶を失った悲しい夜禽の叫び声」とするのは、「傷歌行」に「春鳥翻南飛、翩翩独翱翔。悲声命儻匹、哀鳴傷我腸。」（春鳥は翻りて南に飛び、翩翩として独り翱翔す。悲声もて儻匹を命め、哀鳴しては我が腸を傷ましむ。）とあることをふまえての発想だと思われる。しかし明帝「長歌行」では、「傷歌行」のこの四句を「哀彼失群燕、喪偶独鶯鶯。」と、「春鳥」を「燕」と

理解して、二句に縮めており、そうした場合、明帝「長歌行」の「衆禽」と「燕」が同じであるとは考えにくく、氏のように「衆禽」の声を悲しみの声と解釈するのは、難しいのではないだろうか。

以上のように、「燕雀」「衆禽」は小人や俊臣をイメージさせるもので、なぜその声を「き（聴・聞）」のか、という理由ははっきりしない。ただ徐幹「情詩」では、君の声が聞きたいのにその声はなく、「燕雀」の声しか聞こえない、とし、明帝「長歌行」では、城が荒廃しているため、耳を傾けても「衆禽」の音がするだけで、人はいない、としていると考えることができる。

つまり魏の両詩では、会いたい人がいないことや、誰もいない荒廃した周囲の状況を、鳥の声を「き（聴・聞）」くことで表現している、と言うことができる。

また「き（聴・聞）」くという表現ではないが、曹植の詩には「孤鴛鴦」という用例がある。

曹植「贈王粲詩」〔『文選』卷二四〕

樹木發春華	樹木は春華を發き
清池激長流	清池は長流を激しくす
中有孤鴛鴦	中に孤鴛鴦有り
哀鳴求匹儻	哀鳴して匹儻を求む
我願執此鳥	我 此の鳥を執らへんことを願ふも
惜哉無輕舟	惜しいかな輕舟無し

後漢から建安期の詩には、「孤鳥」「孤栖」「孤雁」「孤禽」といった用例が見られるが、「孤鴛鴦」は曹植以前には用例が見られない詩語で、李善注には「鴛鴦、喩榮也。言願執鳥而無輕舟、以喩己之思榮而無良会也。」（鴛鴦は、榮を喩ふるなり。鳥を執らへんことを願ふも輕舟無しと言ふは、以て己の榮を思ふも良会無きを喩ふるなり。）とある。

これにしたがえば、池の中に「孤」なる「鴛鴦」がいて、連れ合いを求めて哀しく鳴いており、詠歌主体がこの鳥を捕らえたいと願うが、（君のことを思いつつも会う機会が無いように）残念ながら小舟が無いのだ、ということになる。

（一）で見たように「鴛鴦」は、幸福の象徴であったが、曹植「贈王榮詩」では、本来いるはずの相手が不在のため哀しく鳴く不幸な「鴛鴦」（王榮）として、捉えられている。

（三）西晋

（二）の魏の詩では、人がいないことを示していたが、同じ系譜のものが西晋にもある。

潘岳「楊氏七哀詩」（『古詩紀』卷三八）

：

山氣冒岡嶺 山氣は岡嶺を冒し
長風鼓松柏 長風は松柏を鼓つ

堂虚聞鳥声 堂は虚にして鳥声を聞き
室暗如日夕 室は暗くして日夕のごとし

：

潘岳「楊氏七哀詩」は、風が吹き付ける中、主である楊氏を亡くした部屋は、ひっそりとして鳥の鳴き声が聞こえ、暗く夕暮れのようなうだ、とし、本来いるべきの楊氏の不在を嘆き、聞こえてくる鳥の声という聴覚的なものと、暗い部屋という視覚的なものを対句にして、その静寂さを表現している。

張華「答何劭詩二首」其一（『文選』卷二四）

：

自昔同寮寗 昔より寮寗を同じくし
於今比園廬 今に於いては園廬を比べたり
衰夕近辱殆 衰夕は辱と殆とに近く
庶幾並懸輿 庶幾はくは並に輿を懸けんことを
散髮重陰下 髪を重陰の下に散らし
抱杖臨清渠 杖を抱きて清渠に臨まん
属耳聽鸛鳴 耳を属けて鸛鳴を聴き
流目翫儵魚 目を流して儵魚を翫ばん
從容養余日 從容として余日を養ひ
取樂於桑榆 樂しみを桑榆に取らん

張華「答何劭詩二首」其一是、昔から同じ役職で、居

宅も隣り合う何処に對して、詠歌主体が隱退して共に車を懸け、林の木陰では「鷺」（鶯）の囀りに耳を傾け、杖を手にしながら澄んだ流れのほとりでは小魚が泳ぐのを眺めたい、と老い先の楽しみを味わいたいことを述べる。

「鷺鳴」は、『毛詩』小雅・伐木の「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷于喬木。嚶其鳴矣、求其友声。」（木を伐ること丁丁、鳥の鳴くこと嚶嚶たり。幽谷より出でて、喬木に遷る。嚶として其れ鳴き、其の友を求むる声あり。）をふまえており、鳥が友を求めて鳴く姿を、詠歌主体とその友である何処との関係になぞらえ、その声に耳を傾けたい、とする。

以上の二首は、魏の詩と同じ系譜で、あるべき声がないことを言う。

傳玄「放歌行」（『樂府詩集』卷三八）

：

丘塚如履墓	丘塚は履墓のごとくして
不識故与新	故と新とを識らず
高樹來悲風	高樹に悲風 來たりて
松柏垂威神	松柏は威神を垂る
曠野何蕭條	曠野 何ぞ蕭條たる
顧望無生人	顧望するも生人無し
但見狐狸迹	但だ狐狸の迹
虎豹自成群	虎豹の自ら群を成すを見るのみ
孤雛攀樹鳴	孤雛は樹に攀ちて鳴き

離鳥何續紛 離鳥は何ぞ續紛たる
愁子多哀心 愁子 哀心多く
塞耳不忍聞 耳を塞ぎて聞くに忍びず
長嘯淚雨下 長嘯して涙は雨のごとく下り
太息氣成雲 太息して氣は雲を成す

傳玄「放歌行」は、「愁子」の目の前に広がる情景を描写する。それは、新旧のわからない塚、人のいないもの寂しい曠野で、そこには狐狸の巢や虎豹が群の成すのが見えるだけであり、「孤雛」が樹によじ登って鳴き、「離鳥」が乱れ飛ぶ。そして哀しみの多い「愁子」は、その声を聞くことが我慢できない、とする。つまり「愁」のある「子」が、聞こえてくる「孤」独な「雛」の声に耳を塞ぐのである。

張載「七哀詩二首」其二（『文選』卷二三）

：

顧望無所見	顧望するも見所無く
唯睹松柏陰	唯だ松柏の陰を睹るのみ
肅肅高桐枝	肅肅たり高桐の枝
翩翩棲孤禽	翩翩として孤禽を棲ましむ
仰聽離鴻鳴	仰ぎては離鴻の鳴くを聴き
俯聞蜻蛚吟	俯しては蜻蛚の吟 ^{うた} ふを聞く
哀人易感傷	哀人は感傷し易く
觸物增悲心	物に触れて悲心を増す

張載「七哀詩二首」其二は、秋の夕暮れに、あちこちを見回しても松や柏の墓地にある木の黒い姿が見えるだけで、高い桐の枝は一羽の鳥を宿しており、空を仰いで「離鴻」の声を聴き、地上に俯すと「蜻蛉」（蟋蟀）の聲が聞こえる、とし、このような秋の風物に接すると悲しい思いが募る、とする。

「仰聴離鴻鳴、俯聞蜻蛉吟」の二句は、『楚辞』九弁の「雁離雁而南遊兮、鵲鷄啁哳而悲鳴。独申旦而不寐兮、哀蟋蟀之宵征。」（雁は雁として南に遊び、鵲鷄は啁哳として悲鳴す。独り旦を申へて寐ねられず、蟋蟀の宵に征くを悲しむ。）をふまえており、秋の風物として「雁」（鴻）、「蟋蟀」の声を挙げることは古くから見られる。

ただこの二句は、「聴」「聞」と聴覚を表す動詞を重ねており、その使いわけがどこまで意識されていたかははっきりしないが、俯仰対の発展の歴史から見ると注目できるものである。また同時代の潘岳「秋興賦」(『文選』卷一三)に、「熠燿粲於階闔兮、蟋蟀鳴乎軒屏。聴離鴻之晨吟兮、望流火之余景。」(熠燿 階闔に粲り、蟋蟀 軒屏に鳴く。離鴻の晨吟を聴き、流火の余景を望む。)とあることから、「離鴻」の声は耳を傾ける対象とされているのであろう。

この両詩において、詠歌主体が「き（聴・聞）」しているのは、「孤」「離」といった鳥の鳴き声である。(二)

で述べたように、「孤」なる鳥の用例は、後漢の頃から見られ、また「孤」「離」が対になっているものは、阮籍「詠懷詩一七首」其一五(『文選』卷二三)に「孤鳥西北飛、離獸東南下。」(孤鳥 西北に飛び、離獸 東南に下る。)、陸機「贈從兄車騎」(『文選』卷二四)に「孤獸思故藪、離鳥悲旧林。」(孤獸 故藪を思ひ、離鳥 旧林を悲しむ。)と、見られる。

したがってこの両詩は、これらを継承し、「孤」「離」といった状態にある鳥の鳴き声を「き（聴・聞）」くことが、詠歌主体に悲哀をもたらすと考えられていることがわかる。

陸機「苦寒行」(『文選』卷二八)

：

凝冰結重礪	凝冰は重礪に結び
積雪被長巒	積雪は長巒を被ふ
陰雪興巖側	陰雪は巖側に興り
悲風鳴樹端	悲風は樹端に鳴る
不覩白日景	白日の景を覩ずして
但聞寒鳥喧	但だ寒鳥の喧しきを聞くのみ
猛虎憑林嘯	猛虎は林に憑りて嘯き
玄猿臨岸嘆	玄猿は岸に臨みて嘆く

：

陸機「苦寒行」は、行役する北方の厳しい自然を、奥

深い谷川に固まっている氷、長く連なる山を覆っている積雪、岩の側からわき起こる黒雲、木々の梢で鳴る悲風、太陽の光が遮られ視界が働かない中で、聞こえてくる「寒鳥」のけたたましい声、林に身を寄せて吠え立てる虎、川岸の木でわびしく鳴く黒猿などで表現している。

「寒鳥」は、阮籍「詠懷詩十七首」其十四（『文選』卷二三）に「灼灼西隤日、余光照我衣。迴風吹四壁、寒鳥相因依。」（灼灼として西に墮るる日、余光 我が衣を照らす。迴風は四の壁に吹き、寒鳥は相因り依る。）とあり、身を寄せ合う寒中の鳥の意であるが、陸機「苦寒行」では、その声だけが聞こえると、目に見えないものの音に包まれ、それが迫ってくる恐怖を表現している。

興膳宏氏は、陸機「苦寒行」について、「北方の風土の酷烈さを、旅人の口吻を借りて詠嘆的にうたった形になっているが、それが南人である陸機の異和感のきしみを形象したものであることは、改めてあげつらうまでもあるまい。」とする。⁽¹⁰⁾これをふまえると、「寒鳥」は過酷な状況に在る詠歌主体に、さらなる悲哀をもたらす声として聞こえている、と言うことができる。

以上の西晋の詩では、鳥の声を「き（聴・聞）」くことが、魏の詩と同様にあるべき声がないことを示す場合と、詠歌主体に悲哀をもたらす場合がある、ということがわかる。

（四）東晋

「前溪歌七首」其二（『樂府詩集』卷四五）

為家不鑿井 家為すも井を鑿たず
担瓶下前溪 瓶を担ひて前溪に下る
開穿乱漫下 開穿するは乱漫の下
但聞林鳥啼 但だ林鳥の啼くを聞くのみ

「前溪歌七首」其二は、其一に「憂思出門倚、逢郎前溪度。」（憂思にして門を出でて倚り、郎に逢ふに前溪度る。）とあるように、「前溪」は女性が男性に会うために出かける場所であるが、そこで草が乱れ生えている側に井戸を掘ると、ただ「林鳥」の鳴き声が聞こえてくるだけだ、とする。

「林鳥」は林を飛び交う鳥のことで、潘岳「悼亡詩三首」其一（『文選』卷二三）では、「如彼翰林鳥、双栖一朝隻。」（彼の翰林の鳥の、双び栖むも一朝に隻なるがごとし。）と、林を飛び交う鳥が、つがいで棲んでいたのに、にわかに独りぼっちになる、という悲しいイメージを持つ鳥である。したがってこれをふまえると、「前溪歌七首」其二は、魏の詩と同様に、「林鳥」の声が聞こえるだけで、会いたい人の声は聞こえない、ということになる。

しかし同じ「林鳥」でも、陶淵明「丙辰歲八月於下潁田舍穫」（『陶淵明集』卷三）では、「悲風愛靜夜、林鳥喜晨開。」（悲風 靜夜を愛し、林鳥 晨に開くを喜ぶ。）と、夜の静けさに趣を添え愛おしく思う「悲風」と同様に、その囀りは詠歌主体にとって、明けゆく朝を喜ばせ

る声となつてゐる。

小川環樹氏は、この「悲風」について、「風の音の悲しさは主観の感情の反映としてではなく、ただ何となくもの悲しげな響きとして客観的に鑑賞される特質をもつ。」と述べているが、詠歌主体は「林鳥」も悲しい声ではないものとして、その声をきき取っていることがわかる。

陶淵明の詩には、自然の音を「き（聴・聞）く」という例が見られないが、魏や西晋の詩のように悲哀をもたらすものではない鳥の声が、取り上げられている点は注目できる。

(五) 劉宋

「聴」くという形になっていないが、謝靈運には次のような詩がある。

謝靈運「夜宿石門」(『古詩紀』卷五八)

朝攀苑中蘭 朝に苑中の蘭を攀り

畏彼霜下歇 彼の霜下に歇きんことを畏る

暝還雲際宿 暝に雲際の宿に還り

弄此石上月 此の石上の月を弄す

鳥鳴識夜棲 鳥の鳴きて夜に棲むを識り

木落知風發 木の落ちて風の発るを知る

異音同至聴 異音 同に聴を至し

殊響俱清越 殊響 俱に清越なり

妙物莫為賞 妙物 為に賞する莫く

芳醕誰与伐 芳醕 誰か与に伐らん

：

謝靈運「夜宿石門」は、ある晩、石門山に登り、月を眺めながら作った詩で、鳥が鳴いて樹に夜の宿りをしてゐることがわかり、木の葉が落ちて風が起こったことがわかり、このような珍しい音が共に耳に入り、その殊なる響きはそれぞれ清らかに遠く広がっていくが、この素晴らしいものを共に賞する友はおらず、芳しい酒は誰と共に賞美すればよいのか、とする。

ここでの「異音」「殊響」は「鳥鳴」「木落」の音で、夜に聞こえた声・音であるが、それらを含んだ石門の夜景を「妙物」と賞している。したがって同じ夜の鳥の声を「き（聴・聞）」いても、詠歌主体にもたらされる心情は、魏の詩とは大きく異なっている。つまり（四）に挙げた陶淵明の「林鳥」と同じように、悲しい声として鳥の声を聴いていないのである。

また謝靈運には、次のような詩がある。

謝靈運「登池上樓」(『文選』卷二二)

：

衾枕昧節候 衾枕 節候に昧く

褰開暫窺臨 褰げ開きて暫く窺ひ臨む

傾耳聆波瀾 耳を傾けては波瀾を聆き

舉目眺嶠嶽 目を舉げては嶠嶽を眺む

初景革緒風 初景は緒の風を革め

新陽改故陰 新陽は故の陰を改む

池塘生春草 池塘 春草生じ

園柳變鳴禽 園柳 鳴禽を變ず

：

謝靈運「登池上楼」は、長く臥せっていたために季節

の移り変わりがわからず、帷を開いてしばらくあちこち

を眺め、耳を傾けては波の音を聴き、目を挙げては険し

い山を眺める、とする。すると詠歌主体は、春の初めに

冬の名残の風と陰の気が改まり、池の堤に春の花が生じ、

園の柳に鳴く鳥の声も変わってきている、ことに気づく。

これは花という視覚的なものと、鳥の声という聴覚的

なもので、冬から春へと季節が変化していることを認識

しており、後の南斉の詩につながっていくものと考えら

れる。

「聞」の四例は、全て鮑照である。

鮑照「擬行路難一九首」其一〇『鮑氏集』卷八)

君不見薜華不終朝 君 見ずや 薜華の朝を終へず

須臾淹冉零落銷 須臾にして淹冉として零落し銷

ゆるを

一去無還期 一たび去りて還る期無ければ

千秋萬歲無音詞 千秋萬歲 音詞無し

孤魂煢煢空隴間 孤魂 煢煢として隴間に空しく

独魄徘徊遶墳基 独魄 徘徊として墳基を遶る

但聞風聲野鳥吟 但だ風聲 野鳥の吟を聞くのみにして

：

豈憶平生盛年時 豈に平生 盛年の時を憶はんや

：

鮑照「擬行路難一九首」其一〇は、むくげの花があつ

と萎んで落ちてしまふのと同じように、若者も直ちに墓

地に突き進み、一度逝ってしまったら二度と戻ること

無く、音沙汰は永久に無くなり、その魂は墓の塚の間を

浮遊し、魄は墓地をさまよい、そんな墓地ではただ風の

音と野鳥の囀りだけが聞こえ、平生を思い出すことはな

い、とする。

墓地に風が吹く例は、「古詩一九首」其一四『文選』

卷二九)に「出郭門直視、但見丘与墳。古墓犂為田、松

栢摧為薪。白楊多悲風、蕭蕭愁殺人。」(郭門を出でて直

ちに視れば、但だ丘と墳とを見るのみ。古墓は犂かれて

田と為り、松栢は摧かれて薪と為る。白楊は悲風多く、

蕭蕭として人を愁殺す。)とあるように、古くは漢から見

られ、「但だ風の音が聞こえるだけだ」という表現は、詩

では魏鼓吹曲「屠柳城」に、「屠柳城、功誠難。越度隴塞、

路漫漫。北踰平岡、但聞悲風正酸。」(柳城を屠すに、功

誠に難し。隴塞を越度すれば、路 漫漫たり。北に平岡を踰ゆれば、但だ悲風の正に酸たるを聞くのみ。」と、魏の頃から見られる。

また墓地で鳥が鳴く例は、(一)に挙げた「古詩為焦仲卿妻作」に見られ、「野鳥」の用例は、傳玄「雜詩」(『文選』卷二九)に「蟬鳴高樹間、野鳥号東箱。」(蟬は高樹の間に、野鳥は東箱に号ぶ。)とあり、この詩は「古詩一九首」其七(『文選』卷二九)の「秋蟬鳴樹間、玄鳥逝安適。」(秋蟬は樹間に鳴き、玄鳥は逝きて安にか適かん。)をふまえていることから、秋の風物であることがわかるが、鮑照「擬行路難一九首」其一〇では、季節が特に秋ということではなく、野の鳥という意味であらう。

したがって墓地に吹く風の音、そこで聞こえる鳥の声というのは、漢・魏の頃から見られるものであるが、「但聞」としながらも、風の音と鳥の鳴き声という二つの音が聞こえてくるだけだ、とするものは、鮑照「擬行路難一九首」其一〇以前には見られず、それらの音しか聞こえない寂しく悲しい場所であることを強調している、と言うことができる。

鮑照「自礪山東望震沢」(『鮑氏集』卷六)

瀾漫潭洞波 瀾漫たり潭洞の波

合沓嶂嶂雲 合沓たり嶂嶂の雲

漲島遠不測 漲島は遠くして測らず

崗澗近難分 崗澗は近くして分かち難し

幽篁愁暮見 幽篁 暮に見るを愁ひ
思鳥傷夕聞 思鳥 夕べに聞くを傷む

鮑照「自礪山東望震沢」は、礪山から東の方の震沢を望んだ情景を、深い淵の奥にあたる波、崖の険しい峰にわく雲、そして遠景、近景の順に描写した後、ほの暗い竹叢は夕方に見るにはもの寂しく、伴侶を思う鳥の声が夕方に聞こえるのは心が傷む、とする。
詩語としての「思鳥」は、鮑照以前には陸機に用例が見られる。

陸機「赴洛二首」其一(『文選』卷二六)

臺臺孤獸騁 臺臺として孤獸 騁せ

嚶嚶思鳥吟 嚶嚶として思鳥 吟ず

感物恋堂室 物に感じて堂室を恋ひ

離思一何深 離れの思ひ 一へに何ぞ深き

:

陸機「赴洛二首」其一は、故郷の呉から親しい人々と離れ、独り洛陽に旅するわびしさを述べたものである。引用した箇所では、道中で群から離れた獣が走り、「嚶嚶」と仲間を求めて鳥が鳴く、という景物に心動かされて母や妻を恋しく思い、別れの悲しみがいつそう深まる、と

する。

陸機「贈從兄車騎」(『文選』卷二四)

：

感彼帰塗艱 彼の帰塗の艱しきに感じ

使我怨慕深 我をして怨慕すること深からしむ

安得忘帰草 安んぞ忘帰の草を得て

言樹背与衿 言に背と衿とに樹ゑん

斯言豈虚作 斯の言 豈に虚作ならんや

思鳥有悲音 思鳥に悲音有り

陸機「贈從兄車騎」は、入洛して数年後、故郷にいる従兄の陸曄に故郷や親しい人を思う切なさを述べたものである。引用した箇所では、故郷への帰り道の険しさを思い浮かべるにつけ、嘆き慕う情は深くなるので、なんとかして帰りを忘れるという草を得て、我が身の後や前に植えたい。そしてこの言葉は決して空言ではなく、友を思う鳥でさえ悲しい声で鳴くのだ、とする。

このように陸機の二例では、「思鳥」は身内や友を思う鳥である。(二)に挙げた傳玄「放歌行」、張載「七哀詩二首」其二では、「孤」「離」の状態にある鳥の声が、詠歌主体の悲哀を表象するものであったが、この両詩では鳥の行為を表す「思」とし、鳥も人間も同じように、とすること、より詠歌主体が「思鳥」に自己投影していると考えることができる。そして鮑照「自礪山東望震沢」

もこれを踏襲し、聞こえてくる伴侶を思う鳥の声に心を傷めているのであるう。

鮑照「擬阮公夜中不能寐」(『鮑氏集』卷四)

漏分不能臥 漏分 臥す能はず

酌酒乱繁憂 酒を酌みて繁憂を乱らす

惠氣憑夜清 惠氣は夜に憑りて清く

素景縁隙流 素景は隙に縁りて流る

鳴鶴時一聞 鳴鶴 時に一たび聞こえ

千里絶無儔 千里 絶えて儔無し

佇立為誰久 佇立して誰が為にか久しくする

寂寞空自愁 寂寞として空しく自ら愁ふ

鮑照「擬阮公夜中不能寐」は、阮籍「詠懷詩一七首」其一を擬作したものである。

阮籍「詠懷詩一七首」其一(『文選』卷二三)

夜中不能寐 夜中 寐ぬる能はず

起坐彈鳴琴 起坐して鳴琴を弾ず

薄帷鑑明月 薄帷は明月に鑑り

清風吹我衿 清風は我が衿を吹く

孤鴻号外野 孤鴻は外野に号び

朔鳥鳴北林 朔鳥は北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊して將た何をか見る

憂思獨傷心 憂思して独り心を傷ましむ

共に八句から成り、二句ずつ「眠れない詠歌主体の行動」↓「外の情景描写」↓「鳥の鳴き声」↓「詠歌主体の思い」という構成になっている。

この五・六句について、鈴木敏雄氏は、擬作の「鳴鶴」は原作の「孤鴻」「朔鳥」の、「千里」は「外野」「北林」の言い換えであり、その上で「絶無儔」を加え、原作は鳴号する原因を明かしていないが、擬作は並んで飛べるものがない、と明言している、とする。そしてさらにこの二句は、「傷歌行」古辞の「春鳥翻南飛、翩翩独翱翔。悲声命儔匹、哀鳴傷我腸。」を承け、また『周易』中孚に「九二鳴鶴在陰。其子和之。」（九二は鳴鶴 陰に在り。其の子 之に和す。）と、岩陰で鳴く親鶴とそれに声を合わせて鳴く子鶴（徳のある人の善言には必ず応じる人がある）、とあるのもふまえ、これと逆になった「鳴鶴」は孤立によって鳴くものとして認識されている、とする。¹⁵⁾ 以上の氏の論をふまえれば、鮑照「擬阮公夜中不能寐」の孤立した「鳴鶴」は、先の鮑照「自礪山東望震沢」の「思鳥」と同様に、そこに思う伴侶がいらないという点が共通していることがわかる。

鮑照「秋夜詩二首」其二（『鮑氏集』卷五）

遁跡避紛喧 跡を遁れて紛喧を避け

質農棲寂寞 農に質へて寂寞に棲む

荒径馳野鼠 荒径には野鼠 馳せ

空庭聚山雀 空庭には山雀 聚まる
既遠人世歎 既に人世の歎びに遠ざかり
還頼泉井樂 還た泉井の楽しみに頼る
折柳樊場圃 柳を折りて場圃に樊し
負綆汲潭壑 綆を負ひて潭壑に汲む
霽旦見雲峯 霽旦に雲峯を見
風夜聞海鶴 風夜に海鶴を聞く

鮑照「秋夜詩二首」其二は、身を隠し寂しい暮らしをする詠歌主体の暮らしぶりを述べて、晴れた朝には雲の峰が目に入り、風の夜には「海鶴」の声が聞こえる、とする。唐以前の詩において、この詩以外に「海鳥」の用例は見られず、鶴が一羽なのかどうかは明らかではないが、その声は詠歌主体に感傷をもたらす声である。

先の鮑照「擬阮公夜中不能寐」、「秋夜詩二首」其二において聞こえるのは鶴の鳴き声であったが、声に限らず鮑照の詩には鶴が多く詠まれる。

鮑照「代別鶴操」(『鮑氏集』卷三)

双鶴俱起時 双鶴 俱に起つ時

徘徊滄海間 滄海の間を徘徊す

長弄若天漢 長弄は天漢のごとく

輕軀似雲懸 輕軀は雲の懸かるに似たり

幽客時結侶 幽客 時に侶と結び

提携遊三山 提携して三山に遊ぶ

青繳凌瑤台 青繳は瑤台を凌ぎ

丹羅籠紫煙 丹羅は紫煙を籠む

海上悲風急 海上 悲風 急に

三山多雲霧 三山 雲霧多し

散乱一相失 散乱して一たび相失へば

驚孤不得住 孤なるに驚くも住まるを得ず

緬然日月馳 緬然として日月は馳せ

遠矣絶音儀 遠きかな 音儀を絶つ

有願而不遂 願ふこと有るも遂げず

無怨以生離 怨むこと無きも以て生きながらにして離る

鹿鳴隱深草 鹿は鳴きて深き草に隠れ

蟬鳴隱高枝 蟬は鳴きて高き枝に隠る

心自有所存 心に自ら存する所有るも

旁人那得知 旁人 那ぞ知るを得んや

「別鶴操」古辞は、商陵の牧子が作つたものであるとされるが、鮑照「代別鶴操」は、黄節によれば「艶歌何嘗行」古辞に基づく、とされる。

その内容は、つがいの鶴が仙人に捕らえられそうになつて散りぢりになり、一度互いを見失うと、一人ぼつちに驚いても一緒にすることはできず、声も姿も絶えて、会いたいと思つても生き別れる、というものである。

つがいの鶴は、「古詩一九首」其五（『文選』卷二九）

に、「願為双鳴鶴、奮翅起高飛。」（願はくは双鳴の鶴と為り、翅を奮ひて起ちて高飛せん。）などと漢の詩からあるモチーフである。

またつがいの鶴が捕らえられ散りぢりになる話は、『搜神記』卷一四に「采陽県南百余里、有蘭巖山、峭拔千丈、常有双鶴、素羽皦然、日夕偶影翔集。相伝云、昔有夫婦、隠此山數百年、化為双鶴、不絶往来。忽一旦、一鶴為人所害、其一鶴歲常哀鳴、至今響動巖谷、莫知其年歲也。」（采陽県の南のかた百余里、蘭巖山有り、峭しきこと千丈を抜き、常に双鶴有り、素羽 皦然として、日の夕べ影を偶して翔び集ふ。相伝へて云ふ、昔 夫婦有り、此の山に隠ること數百年、化して双鶴と為り、往来を絶やさず。忽ちにして一旦、一鶴 人の害する所と為り、其の一鶴 歳常に哀鳴し、今に至るも巖谷を響動せしむること、其の年歳を知るもの莫きなりと。）などである。したがって鮑照「代別鶴操」は、これらもふまえていると考えられるが、ここでの鶴も伴侶を失い、ひとりぼつちの鶴である。そしてこの「別鶴」という語は、鮑照の詩にあと三例見られる。

鮑照「陽岐守風」（『鮑氏集』卷七）

：

洲迴風正悲 洲 迴かにして 風 正に悲しく

江寒霧未歇 江 寒くして 霧 未だ歇きず

飛雲日東西 飛雲は日に東西し

別鶴方楚越 別鶴は方に楚越なり

鮑照「陽岐守風」は、眼前に広がる情景を述べて、川の中洲は広々として風が悲しげに吹き、長江は冷たく霧が立ちこめ、空を行く雲は毎日東西に分かれ、伴侶を失った鶴は今や楚と越のように遠さかる、とする。

鮑照「擬行路難一八首」其三（『鮑氏集』卷八）

含歌攬涕恒抱愁 歌を含み涕を攬りて恒に愁ひを抱

けば

人生幾時得為樂 人生 幾時か楽しみを為すを得ん

や

寧作野中之双鳧 寧ろ野中の双鳧と作るも

不願雲間之別鶴 雲間の別鶴たるを願はず

鮑照「擬行路難一八首」其三は、歌うのをこらえ涙をぬぐって愁いを抱いてばかりなら、人生はいつ楽しむことができるのか、いつそ野原のつがいの鳧になろうとも、雲間を翔る伴侶を失った鶴にはなりたくない、とする。最後の二句の意は判然としないが、「別鶴」となるのを避けたい、とする。

鮑照「紹古辞七首」其三（『鮑氏集』卷四）

紛紛羈思盈 紛紛として羈思 盈ち
慊慊夜弦促 慊慊として夜弦 促す
訪言山海路 訪ふは言に山海の路
千里歌別鶴 千里 別鶴を歌ふ
絃絶空咨嗟 絃 絶えて空しく咨嗟し
形音誰賞録 形音 誰か賞録せんや

鮑照「紹古辞七首」其三は、旅先で物思ひは募り、夜の琴の弦をせわしく弾きながら、山や海辺の路を訪ね歩き、千里の道で「別鶴操」と歌い、弦が切れても嘆くのは無駄で、姿や形を喜んでくるれる者は誰もいない、とする。ここでの「別鶴」は曲名であるが、その曲を歌うのは独り旅する者である。

そして「別鶴」ではないが、鮑照「与荀中書别」（『鮑氏集』卷六）では、「慙無黄鶴翅、安得久相従。」（黄鶴の翅無きを慙づれば、安んぞ久しく相従ふを得んや。）と、旧交のある荀中書に対して、つがいで飛ぶ「黄鶴」のような羽を持つていないので、ずっと付き添っていられないことを恥じる、とするものがある。また鮑照「歳暮悲」（『鮑氏集』卷八）に「皛潔冒霜雁、飄揚出風鶴。」（皛潔たり霜を冒すの雁、飄揚たり風に出づるの鶴。）、鮑照「冬至」（『鮑氏集』卷八）に「眇眇負雪鶴、皎皎带霜雁。」（眇眇たり雪を負ふの鶴、皎皎たり霜を帯ぶるの

雁。」と、冬空に飛ぶ「雁」と「鶴」を対句にしたものがある。¹⁸⁾

さらに詩ではないが、鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷一四)では、「歳崢嶸而愁暮、心惆悵而哀離。」(歳 崢嶸として暮るるを愁ひ、心 惆悵として離るるを哀しむ。)と、仙禽である鶴が人間に捕らえられ、年が慌ただしく暮れるのを憂い、仲間から離れてしまったことを悲しむことになった、とある。

以上のように鮑照の詩には多くの鶴が詠まれることから、彼が鶴に対して特別な思いを持っていたのではないかと、ということが推測できる。そしてそのほとんどが伴侶のいない孤独な鶴であり、その飛ぶ姿や聞こえてくる声は、詠歌主体の心情を動かすものであったと考えられる。しかしなぜ鶴なのか、という理由ははっきりしない。このことについては、今後、唐以前の詩における鶴の詠まれ方を見ていくことで、そのコードを明らかにしていきたい。

また「聴」ではなく、「聞」となっている点も気にかかる。これは鮑照には楽府体の詩が多く、作中人物や詠歌主体が「き(聴・聞)」く姿を描く、という彼の表現スタイルによるものと考えることができる。ただ鶴の声については、古くは『毛詩』小雅・鶴鳴に「鶴鳴于九皋、声聞于野。」(鶴 九皋に鳴く、声 野に聞こゆ。)とあり、その毛伝に「皋沢也。言身隱而名著也。」(皋は沢なり。身 隠るるも名 著はるるなり。)、鄭箋に「興者喻賢者

雖隱居人咸知之。」(興するは賢者 隱居すと雖も人咸之を知るに喩ふ。)とあるように、鶴の声が野まで聞こえることを、隱居する賢者の名声が遠くまで伝わることに喩える例がある。そのため鶴の声は「聞」く・「聞」こゆものと考えられていたのかも知れない。¹⁹⁾

以上不明な点はいくつかあるが、鮑照の詩では、孤独や悲哀を鳥の声に「聞」いており、これは西晋の詩と同じである、とすることができ。

(六) 南斉

南斉の「聴」の三例は、全て謝朓である。

謝朓「冬緒羈懷示蕭諮議虞田曹劉江二常侍」(『謝宣城詩集』卷二)

寂寞此閑帷 寂寞たり 此の閑帷
琴樽任所对 琴と樽と对ふ所に任ず
客念坐嬾媛 客念は坐る嬾媛たり
年華稍菴蔓 年華は稍く菴蔓たり
夙慕雲沢遊 夙に慕ふ 雲沢の遊び
共奉荊台續 共に奉ず 荊台の續
一聴春鶯喧 一たび春鶯の喧しきを聴き
再視秋虹没 再び秋虹の没するを視る
：

謝朓「冬緒羈懷示蕭諮議虞田曹劉江二常侍」は、謝朓が荊州にいた頃、「冬の締め羈^はひの懷^{なみ}ひ」という詩を作って、蕭諮議（蕭衍）、虞田曹、劉常侍、江常侍らに示したものである。引用した箇所では、部屋はもの寂しく人氣も無く帷が垂れており、琴も酒もその気になれば楽しめるが、他郷での思いはそぞろに故郷に引き寄せられ、若い時期は次第に衰え、以前から雲夢沢のあそびに従いたく、共に荊州の役所に仕えているが、この地で春の鶯が喧しく鳴くのを一度聴き、秋の虹が消えるのを二度も見たとする。

「春鶯喧」は、謝莊「懷園引」（『全宋詩』卷六）の「天桃晨暮発、春鶯旦夕喧。」（天桃は晨暮に發き、春鶯は旦夕に喧し。）とあるのをふまえており、鶯の鳴き声に耳を傾けるのは、（三）に挙げた張華「答何劭詩二首」其一以来であるが、謝朓の詩は荊州で春を経験したということを示している。

謝朓「落日同何儀曹煦」（『謝宣城詩集』卷四）

參差複殿影 參差たり複殿の影

氛氲綺羅雜 氛氲として綺羅 雜る

風入天淵池 風は入る 天淵池

芰荷搖復合 芰荷 揺れて復た合す

遠聽雀声聚 遠く聴く 雀声の聚まるを

回望樹陰杳 回望すれば樹陰は杳なれり

：

謝朓「落日同何儀曹煦」は、たくさんのお殿の影が長短に伸び、夕日の中で全てのものが美しく輝いて、天淵池に風が吹くと、菱や荷が揺れてはまた一つになり、ねぐらに集まった雀の囀りを遠くに聴き、辺りを見ると樹々の影が暗く重なり合っている、とする。⁽²⁰⁾
謝朓が薄暮の光景を愛好したことは知られているが、⁽²¹⁾雀の声を心地よいものとして耳を傾けたのは、唐以前の詩においては、おそらく謝朓が初めてであろう。

謝朓「移病還園示親屬」（『謝宣城詩集』卷三）

疲策倦人世 策に疲れて人世を倦み

斂性就幽蓬 性を斂めて幽蓬に就く

停琴佇涼月 琴を停めて涼月に佇み

滅燭聽歸鴻 燭を滅して歸鴻を聴く

：

謝朓「移病還園示親屬」は、役人暮らしにうんざりし、蓬の庵に隠れた詠歌主体が、琴を弾く手を止めて涼月を待ち、灯火を消して帰りに行く「鴻」の声に耳を傾ける、とする。

「停琴佇涼月、滅燭聽歸鴻」の二句は、嵇康「贈秀才入軍五首」其四（『文選』卷二四）の「目送歸鴻、手揮五絃。」（目もて歸鴻を送り、手もて五絃を揮ふ。）をふまえており、嵇康が視覚的に目で見送っていたのに対して、

詠歌主体は敢えて灯火を消すという視覚を遮断した状態で、「帰鴻」の声に耳を傾けている。

堂蘭淑子氏は、「滅燭聴帰鴻」の句について「詩人が灯りを消して『帰鴻』の鳴き声に耳を澄ませ、それに集中し、次第に対象に没入していくという、謝朓の対象との対し方をよく表している。」とし、稿者もこれに賛同するが、(三)の張載「七哀詩二首」其二に挙げた秋の悲哀をもたらず「離鴻」と、この詩の「帰鴻」では、その聴き方が異なっていることがわかる。

謝朓の詩に鳥の声を「聴」く例が多く見られるのは、氏の言うように、対象への没入によるものと考えられるが、好意的に評価されることの少なかった「雀」の声に耳を傾け、視覚を遮断してまで「鴻」の声に耳を澄ませたことは、注目できる。

王融「移席琴室應司徒教」(『古詩記』卷六七)

雪崖似留月 雪崖 月を留むるに似たり

蘿徑若披雲 蘿徑 雲を披くがごとし

潺湲石溜寫 潺湲として石溜 そそ 寫ぎ

綿蠻山雨聞 綿蠻 山雨のごとく聞こゆ

王融「移席琴室應司徒教」は、雪解けの情景を述べて、崖は月が留まっているかのように雪が残り、つたの生い茂っている道は雲を開くかのように雪が解け、さらさらと早瀬の水が流れ、小鳥の声が山に降る雨のように聞こ

える、とする。

「綿蠻」は、『毛詩』小雅・綿蠻に「綿蠻黃鳥、止於丘阿。」(綿蠻たる黃鳥、丘阿に止まる。)とあり、毛伝は「綿蠻小鳥貌。」(綿蠻は小鳥の貌。)とするのに対して、集伝は「綿蠻鳥声。」(綿蠻は鳥声なり。)とする。また王融「三月三日曲水詩序」(『文選』卷四六)では、「雉天采於柔荑、乱嚶声於綿羽。」(天采を柔荑に雜へ、嚶声綿羽に乱る。)と、美しい小鳥が和やかに囀る様を描写するが、李善注に引く薛君注では、「綿蠻文貌。」(綿蠻は文ある貌。)とある。このように「綿蠻」には様々な解釈があるが、春の鳥の声を表す語として「綿蠻」を用いるのは、『毛詩』以来唐以前の詩ではこの詩が最初であり、その様を「山雨」に喩えているのも新奇な表現であると思われる。

以上のように、南斉の詩において鳥の声を「き(聴・聞)く」ことは、魏から劉宋の鮑照まで続いた悲哀を感じさせるものではなく、心地よいもの、あるいは春の鳥の声を聞く喜びとなっていることがわかる。

二 小結

ここまで漢から南斉までの鳥の声を「き(聴・聞)く」という表現のある詩について整理してきた。ここで一先ずのまとめをしておきたい。

漢の詩では、「き(聴・聞)く」対象は共に「鶯鶯」であった。「鶯鶯」は『毛詩』に見られる鳥で、雌雄のむつ

まじさや太平の世で栄えている、というイメージを併せ持つ。そしてその声を、幸福を象徴する声として「き（聴・聞）」いている。

魏の詩では、「き（聴・聞）」く対象は「燕雀」「衆禽」であり、なぜそれらの鳥なのかという理由ははっきりわからない。ただ共に鳥の声を「き（聴・聞）」くことで、会いたい人がいないことや、誰もいないことといった作中人物や詠歌主体の置かれた状況を表現している。また「孤」なる鳥の嚙矢ではないが、曹植には「孤鴛鴦」という詩語がある。漢では「鴛鴦」は幸福の象徴であったが、それを「孤」として、相手がいない状況にある悲哀を見て取っている。このように魏の詩では、本来あるべき人の声がないことや相手がいないといった、「ない」ことに焦点を当てていることがわかる。

西晋の詩では、魏の詩と同じくあるべき声がないことから生じる悲哀を述べるものと、詠歌主体の目の前に「孤」「離」「寒」といった状態に「ある」鳥の声によってもたらされる悲哀を述べるものがある。そしてそこに「ある」鳥の声は、詠歌主体の内面を表象していたり、置かれた状況を示すものとなっている。つまり「ない」ことに焦点を当ててのではなく、そこに「ある」ことに焦点を当てていると言うことができる。

東晋の詩は用例が少ないが、魏の詩と同じ系譜に位置づけられ、相手がいない中、「林鳥」の声だけが聞こえてくることを言う。しかし陶淵明には、同じ「林鳥」の声

でも、悲哀をもたらす声として聞いていない例が見られる。

劉宋の詩では、「聴」くという形ではないが、謝靈運に鳥の鳴き声や木が落ちる音を「妙物」として賞する例や、鳥の声の変化から季節の変化を認識する例が見られる。その一方で鮑照の詩において「聞」こえてくるのは、伴侶のいない孤独な鳥の声で、その声が詠歌主体に悲哀の感情をもたらすのは西晋の詩と同じである。ただその声が、「鶴」という具体的な鳥であることが多い点特徴的である。

南斉の詩における「聴」の三例は、全て謝朓の詩であったが、「鶯」「雀」「鴻」といった対象に悲哀を感じていない。また「聞」の一例である王融「移席琴室應司徒教」は、雪解けの春の情景を述べたもので、ここでも鳥の声に悲哀を感じておらず、春を迎えた喜びを述べている。

以上のように、漢の詩では幸福の象徴として鳥の声を「き（聴・聞）」いていたが、魏・西晋の頃から詠歌主体の状況を示したり、感情を表象したりして、悲哀をもたらすものとして「き（聴・聞）」かれるようになり、これが劉宋の鮑照に継承されていく。

そしてこの悲哀をもたらす系譜とは異なり、鳥の声に悲哀を感じないものが、陶淵明や謝靈運の詩に見られるようになり、南斉の詩につながっていくことになる。

したがってここまでの鳥の声に限れば、「き（聴・聞）」

くことが悲哀だけでなく、喜びももたらすものになった、
と言うことができる。

ではこれらのことをふまえると、主体の鳥の声を「き（聴・聞）」く姿勢について、どのようなことが考えられるのだろうか。以下では、観念（イメージ）の鳥の声を「き（聴・聞）」く、現実の鳥を「き（聴・聞）」く、という視点から考えてみたい。

まず観念の鳥の声を「き（聴・聞）」く場合には、その鳥に予め与えられた観念を「き（聴・聞）」き取っている場合と、詠歌主体の現実や心情を表象させて、観念的に「き（聴・聞）」き取っている場合があると考えられる。

この場合は、現実の鳥を観察してその声を「き（聴・聞）」き取ろうとする姿勢は低く、鳥以外のことを示すために観念の鳥を利用したり、自分の現実や心情を述べるために観念の鳥を用いている、と言うことができる。そしてそこに、既に形成された鳥の文化的・社会的コードの利用や新たなコードの形成が見られる。

これに対して陶淵明や謝靈運には、前代の観念の鳥とは異なる声を「き（聴・聞）」いている例が見られる。ただこれらの例が、実際に現実の鳥を観察した結果なのかどうか、ということは慎重に考えなければならない。なぜなら『毛詩』の季節の鳥や喜びの鳥を詠む伝統を、他の鳥にも転用したとも考えられるからである。しかし謝朓が好意的に評価されることの少なかった「雀」の声に耳を傾け、灯火を消して「鴻」の声に耳を澄ませたこと

は、現実の鳥の声を「き（聴・聞）」こうとする姿勢の表れと考えることができるのではないだろうか。

このように鳥の声は観念なのか、それとも現実なのかということを区別することは難しい。しかしこれを丁寧に読み取り、主体と鳥の声との関係を考察すれば、「き（聴・聞）」くことによって、主体が世界をどのように把握しているのか、という問題を明らかにすることにつながるっていくと考える。

三 梁の鳥の声を「き（聴・聞）」く概説

— 今後の課題として —

梁の詩では、「聴」が九例（「雁（鴻）」三例、「百舌」二例、「鵲」「群雀」「新禽」「独栖鳥」一例ずつ）、「聞」が八例（「百舌（反舌）」二例、「黄鳥」二例、「夜鶴」、「好声音」、「鳴雁」、「春鳥」一例ずつ）ある。

この中で「雁（鴻）」は沈約「晨征曉鴻・蕭子範「夜聽鴈詩」、「百舌」は劉孝綽「詠百舌詩」・劉令嫺「聽百舌詩」、「鵲」は武陵王蕭紀「詠鵲」、「鶴」は沈約「夕行聞夜鶴」と、その鳥を詠じることやその声を「き（聴・聞）」くことが詩題になっている。

また王僧孺「春思」・蕭子顯「春別詩四首」其二では「黄鳥」、簡文帝蕭綱「春日看梅花詩」では「春鳥」の声が聞こえてくることが詠まれている。

したがって梁の詩において、鳥の声を「き（聴・聞）」くことが詩題とされるのは、どのような意味があるのか、

また鳥の声に悲哀や喜びを感じるようになった後に、どのような鳥の声が詠まれるのか、といったことなどを、観念と現実の問題と絡めながら考察できると思われる。

以上多くの課題が残り、また「き（聴・聞）」くという表現のある詩に限ったため、不十分な考察であると思われるが、一先ずのまとめとしてここに書き記し、公にすることで、諸賢のご批評を仰ぐことができれば幸いである。

注

(1) 拙稿「西晋の詩における自然の音について」(『中国中世文学研究』第53号・08年3月・二〇～三五頁)、『詩経』における自然の音について(『中国学研究論集』第20号・08年3月・一～一三頁)、『楚辞』における自然の音について(『中国中世文学研究』第54号・08年9月・一九～三三頁)

(2) 小尾郊一・岡村貞雄訳注『古楽府』(東海大学出版会・80年2月・一〇八～一二二頁) 参照。

(3) 『毛詩』周南・閟雎「閟閟雎鳩、在河之洲。」毛伝「閟閟和声也。」周南・葛覃「黄鳥于飛、集于灌木、其鳴喈喈。」毛伝「喈喈和声之遠聞也。」

(4) 他に遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』では、漢代の作とされる「李陵錄別詩二一首」に、「有鳥西南飛、熠熠似蒼鷹。朝發天北隅、暮聞日南陵。」とあるが、このままでは文意が通じにくく、『太平御覽』卷八一四では「朝發天地隅、暮宿日南陵。」となつてゐること、またこの詩は後人の偽作の疑

いがあることから、考察の対象としなかった。

(5) 柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』(創文社・13年2月・一二七頁) 参照。

(6) 「傷歌行」古辞(『文選』卷二七)「昭昭素月明、暉光燭我牀。憂人不能寐、耿耿夜何長。微風吹蘭闥、羅帷自飄颻。攬衣曳長帶、屣履下高堂。東西安所之、徘徊以彷徨。春鳥鵲南飛、翩翩獨翱翔。悲聲命儻匹、哀鳴傷我腸。感物懷所思、泣涕忽沾裳。佇立吐高吟、舒憤訴穹蒼。」ちなみに『玉台新詠』卷二では、明帝作とされている。

(7) 岡村貞雄『古楽府の継承と起源』(白帝社・00年7月・一五七～一六二頁) 参照。

(8) 富永一登『孤』を用いた文学言語の展開―陶淵明に到るまで―(『未明』二二号・04年3月・八～一五頁) 参照。

(9) 俯仰対は漢、魏の詩では、「俯○」「仰○」の○の部分に視覚を表す動詞を重ねるものが主であったが、魏・王粲「思親詩為潘文則作」(『古詩紀』卷二五)に「仰瞻鼎雲、俯聆飄回。」と、視覚と聴覚を表す動詞を対句にする例が見られるようになり、その後西晋に到って、聴覚を表す動詞を重ねるものが見られるようになる、という表現の発展の歴史がある。

(10) 興膳宏『潘岳・陸機』(筑摩書房・73年9月・一五九頁) 参照。

(11) 小川環樹「風と雲」(『小川環樹著作集』第一卷・筑摩書房・97年1月・二四七頁) 参照。

(12) 陶淵明の「述酒」(『陶淵明集』卷三)に、「重離照南陸、鳴鳥声相聞。」(重離 南陸を照らし、鳴鳥の声 相聞こゆ。)

とあるが、この「鳴鳥」は鳳凰のことであり、同じ「述酒」に「流淚抱中嘆、傾耳聽司晨。」（涙を流して抱中に嘆き、耳を傾けて司晨を聴く。）とあるが、この「司晨」は一番鶏のことなので、考察の対象としなかった。

(13) 「衾枕昧節候、褰開暫窺臨」の二句は、今の尤本にないが、五臣注本にはあり、胡克家の『考異』は「文義からみて、この二句はあるべきで有り、無いものは伝写の際に脱したのであろう。」と言う。そのため有るべきものとして取り扱った。

(14) 遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』では、劉宋の詩として鬼神に分類される「鶴吟」〔異苑〕引『太平広記』卷四六〇）

「晋懷帝永嘉中、徐爽出行田。見一女子。姿色鮮白。就爽言調、女因吟曰、「疇昔聆好音、日月心延佇。如何遇良人、中懷邈無緒。」爽情既諧。欣然延至一屋。女施設飲食而多魚。遂經日不返。兄弟追覓至湖邊。見与女相對坐。兄以簾杖擊女。即化成白鶴。翻然高飛。爽恍惚年余乃差。」（晋の懷帝の永嘉中、徐爽 出でて行田す。一女子を見る。姿色 鮮白なり。

就ち爽 言調すれば、女 因りて吟じて曰く、「疇昔 好音を聆き、日月 心は延佇す。如何せん 良人に遇はんとは、中懷 邈として緒無し。」爽の情 既に諧たり。欣然として一屋に延至せらる。女 飲食を施設するに魚多し。遂に日を経て返らず。兄弟 追覓して湖辺に至る。見るに女と相對して坐す。兄 簾杖を以て女を撃つ。即ち化して白鶴と成る。

翻然として高く飛ぶ。爽 恍惚たるも年余にして乃ち差ゆ。）を採録しており、女が吟じる言葉の中に「聆好音」とあるが、ここでの「好音」は鳥の鳴き声ではなく、「名声」の意と解釈した。

積した。

(15) 鈴木敏雄「鮑照の『擬阮公夜中不能寐』詩について」〔中國中世文学研究〕第18号・86年2月・八〇一〇頁）参照。また「無儔」は、阮籍「詠懷詩一七首」其二「文選」卷二三）に「羈旅無疇匹、俛仰懷哀傷。」という用例がある。

(16) 崔豹『古今注』「別鶴操、商陵牧子所作也。娶妻五年而無子、父兄將為之改娶。妻聞之、中夜起、倚戸而悲嘯。牧子聞之、愴然而悲、乃歌曰、『將乖比翼兮隔天端。山川悠遠兮路漫漫。攬衣不寐兮食忘餐。』後人因為樂章焉。」

(17) 黃節「鮑參軍詩註」〔芸文印書館・71年1月再版・五五頁〕「古辭艷歌何嘗行一作飛鶴行。飛來双白鶴、乃從西北來。五里一反顧、六里一徘徊。」

(18) ここに冬空の「雁」と「鶴」の対句が二例見られるが、鮑照には、「代鳴鴈行」〔鮑氏集〕卷三）「邕邕鳴雁鳴始旦、齊行命侶入雲漢。中夜相失群離亂、留連徘徊不忍散。憔悴容儀君不知、辛苦風霜亦何為。」（邕邕たる鳴雁 鳴きて旦を始め、行を齊へて侶に命じて雲漢に入る。中夜 相失ひて群離乱すれば、留連徘徊して散るに忍びず。憔悴 容儀は君知らず、辛苦 風霜も亦何をか為さんや。）と、仲間を失い群が散りぢりになる雁のことを述べる樂府詩がある。これもふまえ、「雁」と「鶴」の対句の意味について今後考えてみたい。

(19) 沈約にも「夕行聞夜鶴」と題する長編詩がある。また鮑照の詩では、「和王丞詩」〔鮑照集〕卷五）に「夜聽橫石波、朝望宿巖煙。」（夜に聴く 石に横たはる波、朝に望む 巖に

宿る煙。」「還都道中詩三首」其二に（『鮑照集』卷五）「夕
聽江上波、遠極千里目。」（夕べに聴く 江上の波、遠く極む
千里の目。）と、波の音は「聴」くものとなっている。劉
宋以後に増える川や波といった水の音は、「聴」かれること
が多い。この水の音を「き（聴・聞）」くことについては、
稿を改めて論じたい。

（20）興膳宏「謝朓詩の抒情」（『乱世を生きる詩人たち』研文
出版・01年9月・四四三〜四五六頁）など参照。

（21）雀を好意的に見ているものとしては、謝靈運「齋中讀書
詩」（『文選』卷三〇）に「虚館絶諍訟、空庭来鳥雀。」（虚館
には諍訟 絶え、空庭には鳥雀 来る。）とある。

（22）堂蘭淑子「何遜詩の風景―謝朓詩との比較―」（『中国文
学報』第57冊・98年10月・八一頁）参照。